The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	末期がん患者の心理的適応に関する研究
Author(s)	平井, 啓
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	平井　啓（ひらい　けい）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　16663　号
学位授与年月日	平成14年3月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**末期がん患者の心理的適応に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　柏木　哲夫 （副査） 教　授　三木　善彦　　助教授　恒藤　　暁

論文内容の要旨

末期がん患者の心理的適応の問題は常に重要であると考えられてきた。そこで、末期がん患者の心理的適応に与える要因を明らかにすることによって、介入方法を含めて患者の心理的適応およびQuality of Lifeの向上に寄与できるものであると考えられる。本論文では、末期がん患者の心理的適応に関する一連の研究結果について報告する。

第2章の研究では、まず、単一事例での面接による言語行動の分析を通して、末期がん患者の認知的過程について評価した。被験者である末期がん患者の死亡する8日前までの1カ月間、5回の面接が行われた。その結果、被験者の身体的状況の悪化に伴って、言語行動が有意に変化し、被験者の持つ意味的構造が推察された。これらのことから末期がん患者の認知的過程では、患者の身体的状況の認知が、大きく影響を与えていることが明らかとなった。そして、認知という側面からも症状のコントロールの重要性が改めて示され、さらにケアの質の向上のための精神的サポートの必要性も示唆された。

次に、複数の末期がん患者に対する面接とその言語的行動の分析によってその認知的な側面について評価を行った。対象者は、11名のホスピス入院および外来通院中の末期がん患者であった。言語行動を測る尺度により面接の分析を行った。その結果、患者の重症度が高くなると、言語行動面での情動的反応が強くなる結果が得られた。これは、末期がん患者の認知的過程で、患者の身体的状況の認知が大きく影響を与えているためであると考えられた。

これらの結果から、末期がん患者の認知的過程において、身体的状況の与える影響の重要性とが示された。また、パーソンスキーマ理論の観点から、末期がん患者の認知的過程について、現実の厳しい状況を手がかりとする自己の作業モデルと、「生きていく」自己についてのエンデュアリングセルフスキーマが異なるために、苦痛な心的状態をもたらしているというモデルが提示された。

第3章では、末期がん患者の心理的適応を説明する認知的変数として、セルフ・エフィカシーの概念を導入した研究を行った。まず、末期がん患者の病気行動に対するセルフ・エフィカシーを測定する尺度の開発を行った。尺度項目を作成し、心理的適応の尺度とともに、ホスピス外来通院中、ホスピス入院中の末期がん患者50名を対象に構造化面接を行った。因子分析の結果、セルフ・エフィカシー尺度は、3つの下位尺度により構成され、それぞれ最も適合する6項目を選択した。この下位尺度と抑うつ・不安の関係についてパス解析で検討したところ、下位尺度のうち、「情動統制の効力感」が中心的な役割を持つことが明らかにされた。

次に、身体的状況、セルフ・エフィカシーと心理的適応の関係について、構造方程式モデル分析により検討した。

ホスピス外来通院中、ホスピス入院中の末期がん患者85名について検討したところ、セルフ・エフィカシーの3下位尺度、抑うつ、不安、Karnofsky Perfomance Status（KPS）、食事摂取状況、水分摂取状況、推定予後、潜在変数であるセルフ・エフィカシー、情緒的苦痛、身体的状況により構成されるモデルが高い適合度を示した。このモデルにおいて、身体的状況の悪い患者ほど、セルフ・エフィカシーが低く、情緒的苦痛も悪くなることが示された。

さらに、身体的状況、セルフ・エフィカシーと心理的適応の関係について時系列で評価を行った。ホスピス外来通院中、及びホスピス病棟入院中の患者31名を対象に検討した。多変量分散分析の結果、一般活動状態（PS）を統制した場合、日常生活動作に対する効力感と抑うつ・不安が有意に変化することが示された。一方で、構造方程式モデル分析の結果、セルフ・エフィカシーが心理的適応に影響を与えるという関係は、時系列で安定したものであることが明らかにされた。

そして、身体的状況、セルフ・エフィカシー、心理的適応、生存期間との関係について検討した。ホスピス外来通院中、及びホスピス病棟入院中の患者67名を対象に検討した。生存分析の結果、高セルフ・エフィカシー群の方が、低セルフ・エフィカシー群に比べて、有意に長い生存期間を持つことが明らかとなった。一方で、生存期間、セルフ・エフィカシー、PS、抑うつ、不安の関係について構造方程式モデル分析を行ったところ、セルフ・エフィカシーは生存期間へは有意に影響を与えていなかった。これは、PSがこの2つの間の媒介要因となったからである。しかしながら、抑うつ・不安に対してはセルフ・エフィカシーのみが影響を持つ要因であることが明らかとなった。

最後に、末期がん患者のソーシャルサポートと心理的適応の関連について検討した。患者の受けているソーシャルサポートの人数の多さが抑うつの低さに有意に関係していることが明らかになった。一方で、患者の知覚しているソーシャルサポートの質は抑うつ・不安のどちらとも関連が見られなかった。

以上の結果から、セルフ・エフィカシーは、末期がん患者の心理的適応の重要な予測因子であり、身体的な要因と心理的適応を媒介する要因であることが明らかとなった。また、セルフ・エフィカシーとPSの密接な関係が明らかになった。つまり、さまざまな身体的苦痛、日常生活動作における障害を持っている末期がん患者においては、PSをはじめとする身体的要因を考慮したセルフ・エフィカシーが心理的適応向上の対象となり得ると考えられる。

第4章では、がん患者に対する心理学的介入について検討した。まず、これまでのがん患者に対する心理学的介入の動向を概観した。その結果、がん患者への心理学的介入についてはさまざまな研究が行われていた。しかし、その効果に関する結果は全体としてはまだ確定的でないことが明らかとなった。また、心理学的介入研究で用いられている介入技法の内容について整理した結果、末期がん患者の心理的適応の向上を目指すならば、認知行動療法的な介入よりも、患者の実存的テーマを扱う介入の法が有効であることが示唆された。

そこで、これらの研究で用いられていた代表的な介入技法を、精神医療、緩和医療の専門家が末期がん患者の実存的苦痛にどれほど有効であると考えているかについて調査を行った。456名の対象者の回答について分析した結果、支持的表現的アプローチが最も有効な介入方法であると考えられており、実存的苦痛の種類により有効であると判断される介入技法に違いが見られることが明らかになった。さらに、精神科医、心理士、看護婦の職種間で有効性の判断に違いが見られることが明らかとなった。特に看護婦は、他の職種に比べて、今回提示した心理社会的介入が末期がん患者の実存的苦痛に有効であると評価していることが明らかとなった。これらの研究から、末期がん患者に対する心理学的介入についてはさらなる研究が必要であることが明らかとなった。

第5章の研究では、末期がん患者に対する介入を考える際に、重要であると考えられる実存的テーマの一つである死生観について検討した。まず、大学生を対象に作成した27項目の死生観尺度をもとに458名の健常成人を対象に死生観を評価する尺度を作成した。因子分析の結果、3因子12項目の死と生に対する積極性を測定する尺度が作成された。この尺度を用いて、ホスピス外来通院中、及びホスピス病棟入院中の31名の末期がん患者に対して調査を行った。その結果、健常成人に比べて、末期がん患者の方が死や人生について積極的な意味づけや捉え方をしている一方で、死の不安に関しては低くなる傾向にあった。よって、死を間近にするという経験は、実際には死の不安、恐怖を軽減する可能性が示唆され、末期がん患者は想像以上に死に対して積極的に対処していることが示された。

以上の研究から、今後の研究についていくつかの方向性が示された。まず、第2章の研究からは、医療現場における心理学的研究の新たな方法論の可能性、諸理論を統合する可能性が示された。第3章の結果からは、セルフ・エフィカシーを実際のケアの業務に活かすことができるような、より具体的な介入方法の開発の必要性が示された。また、

心身相関の問題の学問的な解明に寄与と医療場面での心理学自体の果たす役割の拡大のために、心身に関する研究のアプローチを統合して検討する研究の必要性が示された。第4章の研究からは、改めて、がん患者に対する心理学的介入研究のさらなる必要性と、末期がん患者においては実存的テーマを扱うことの重要性が示された。第5章の研究からは、死生観についてさらなる調査と、このテーマには哲学的な議論、宗教家を含めた議論の必要性が示された。最後に、本論で行った研究は、末期がん患者の心理的適応というテーマに対する第1歩にすぎない。今後、本論文で示された課題を解決し、末期がん患者の心理的適応の向上につながるような研究をさらに積み重ねて行くことが重要である。

論文審査の結果の要旨

これまでの末期がん患者の持つ心理学的問題についての研究の多くは、事例研究や臨床経験の報告を中心とした記述的なものであった。本研究では、計量的な方法を積極的に用いて実証的な側面からこの問題をとらえたものである。

第2章では、計量的な事例研究を試みている。この研究により末期がん患者における心理的側面に与える身体的要因の影響が記されている。この結果を受けて、第3章では、末期がん患者の認知的な概念の一つとしてセルフ・エフィカシーを取り上げ、尺度作成、多変量解析による身体的要因との関連、時系列変化の検討、生存期間との関連性の検討が行われている。このセルフ・エフィカシーという概念は、これまで末期がん患者の研究において、ほとんど取り上げられてこなかったものであり、それを取り上げ、実証的に検討したことは非常に意義深いといえる。

第4章では、末期がん患者に対する介入研究についての多数の文献の概観と、介入の有効性に関する専門家対象の調査の結果が述べられている。これらは今後の介入研究を考える際の重要な資料となりえる。また、第5章では、末期がん患者の死生観を取り上げた実証的研究が行われている。この話題も今後ますます重要になってくると思われるので、本研究で示された方向性には大きな期待ができる。

本論文は、末期がん患者の心理的適応について、実証的研究により多くの心理学的な理解をもたらす研究である。見いだされた知見は、学術のみならず、これからの緩和医療、ターミナルケアに貢献するところが大である。これより、本論文は、博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものと判定した。